

## 秋田の70回大会史

### スポーツ王国、山田・落合ら輩出

2018年1月19日



第52回大会 母校の秋田商を率いた今川敬三監督。選手でも甲子園に出場した＝1970年



努力の山田に才の落合  
スポーツ好きの県民性

東北にあって、秋田は「スポーツ王国」といわれている。とくに高校スポーツの活動ぶりがめざましい。ラグビー、バスケット、スキー、剣道などが有名だが、野球も全国優勝はないものの、しばしば“王国”の一員らしい活躍をみせる。東北各県の県民性を調査した白川公正（四一）＝青森高教諭＝は、「秋田には、スポーツの能力を高く評価する県民性がある」という。

戦前、全国各地で中学野球の草分けとなったのはナンバースクールといわれた名門校だった。戦後、進学熱が高まり名門校の野球部は振るわなくなったが、秋田では、第一回大会（大正四年）の準優勝校、秋田中（高）が依然健在。戦後も、夏七、春二回と甲子園に出場し、文武両道の伝統を失っていない。母校の野球部長を長く務めた竹内一朔（五三）＝秋田中央高教諭＝によると、遅れがちな運動部員の勉強を教師たちが個人指導する後押し態勢もある。

慶大野球部主将、昨年の日米大学野球でも全日本チームの主将を務めた猿田和三（二五）＝秋田県庁＝は秋田高を五十七年に卒業、二浪して慶大に入った。「高校野球を中途半端にやりたくなかったの、浪人するのも仕方ないと割り切っていた。野球部に限らず、どの部にも半端にやらない、という連中が多かった」。当時の監督、大久保正樹（四〇）＝秋田県教育委員会＝の練習も厳しかった。夏も、雪の冬も午後八時ごろまで、バットを振った。「慶応には進学校から来る連中が多く、彼らに高校時代の練習を聞くと、うちはまるで野球学校のような感じだった」と猿田は笑う。猿田は六十一年の秋の首位打者。

秋田野球部からはプロ選手は出ないものの、早慶など大学で野球を続ける者が多い。五十九年の慶大主将、斎藤頼太郎（二七）＝三菱商事、早大へ進み現在、能代の監督、尾形徳昭（二五）らがいる。

夏の選手権大会の代表は第四十三回大会（三十六年）まで、秋田と秋田商が、第十五回（四年）の秋田師範を除いて独占した。秋田商の全盛期は第四十二、三回大会、両年の選抜大会と四度連続、甲子園の土を踏んだころ。主戦はミラクル投手の異名をとった今川敬三。今川は早大に進み、四十

二年卒業と同時に母校教諭、監督となり、第五十二回（四十五年）、第五十七回（五十年）と二度後輩たちを甲子園へ出場させたが、五十一年、夏の県大会を前にして交通事故死した。高校時代から今川を自宅に下宿させ面倒をみてきた元部長の後藤正男（七四）＝税理士＝は「シンの強い男で、いい監督になると楽しみにしていたのに……」と残念がる。

秋田、秋田商の厚い壁を最初に破ったのは能代。三十八年の第四十五回大会に初出場。監督の太田久（五一）＝能代農事務長＝は能代のOBで明大卒。投手を育てるのがうまかった。のちにプロ野球のサンケイに投じた簾内政雄（四三）＝秋田相互銀行、渡辺節朗（四一）＝NTT東京、山田久志（三九）＝阪急、高松直志（二八）＝NTT東北＝らは太田の教え子。

山田は二年生の夏まで三塁手だった。二年生の夏の県大会3回戦で山田が悪投してサヨナラ負けした。太田は「グラウンドの恥はグラウンドでそそげ」と山田を投手に転向させ、千球ピッチングなどで鍛えた。エラーによる転向命令は口実。太田は大学時代、先輩秋山登（五四）＝解説者、杉浦忠（五二）＝立教大、南海監督＝を見ており、下手投げの速球投手に夢をもっていた。「山田の手首、ヒジの使い方、粘り腰、孤独に耐える精神力」はまさにその素質と見込んでいたのだ。

現在のプロ野球を代表するもう一人の選手、落合博満（三四）＝中日＝は秋田工出。こちらは天才肌で、ふだん満足に練習にも出てこない。試合になると、人なつっこい顔して現れ、打ちまくった。落合が在学中（四十四―六年）の秋田工は弱く、当時の部長、安藤晃（六一）＝会社役員＝は「高校野球のあり方として、使うべきかどうかずいぶん悩んだ」という。